

日本旧石器学会

ニュースレター 第20号

NEWS LETTER No.20

JAPANESE PALAEOLITHIC RESEARCH ASSOCIATION

2010～2011年の国内調査動向

ニュースレター委員会

北海道

網走地域では、北見市吉井沢遺跡の調査が東京大学によって2007年から行われており、3か所の石器集中から忍路子型細石刃核を伴う石器群が出土している。北見市では2011年に北見市教育委員会によって北上2遺跡の調査も行われた。ここでは3か所の石器集中から尖頭器などが出土している。置戸町では札幌学院大学の調査が継続的に行われている。

十勝地域では、上士幌町嶋木遺跡、更別村香川遺跡の調査が行われた。嶋木遺跡では首都大学東京によって2010年より調査が行われており、搔器や赤色顔料が炉の周辺から出土している。香川遺跡では2011年に北海道埋蔵文化財センターによって調査が行われ、1か所の石器集中から忍路子型細石刃核を伴う石器群が出土した。

後志倶知安町峠下遺跡では2009年より札幌国際大学、札幌学院大学によって調査が行われ、細石刃などが出土している。この遺跡は峠下型細石刃核（1959年調査、当時は峠下型彫器）の標識遺跡として知られている。

北海道埋蔵文化財センターによって2011年に調査が行われた木古内町札苅5遺跡では、竪穴住居等縄文時代の遺構にからんで旧石器遺物が出土し、その分布は調査区外にも及んでいる可能性が高いという。美利河技法が行使されたことを示す接合資料が得られている。

東北

2001年度から慶応大学により継続して調査が行われている青森県安部遺跡（尻安部洞窟）は、動物骨とナイフ形石器等と一緒に出土したことで知られている。2011年度の調査では台形石器が

1点出土した。

山形県真室川町丸森1遺跡は東北大学により2008年から2010年にかけて調査が行われた。2,500点を超える遺物が出土し、ナイフ形石器や搔器などが出土している。同県舟形町の高倉山遺跡も東北大学によって2010年度から調査が行われている。2011年の調査では1,200点を超す遺物が出土した。石刃製作の痕跡が全くなく、持ち込まれた石刃や石器が使用された遺跡と推測されている。「東山系」と呼ばれるナイフ形石器や搔器、小坂型彫刻刀形石器が出土している。また、寒河江市の高瀬山遺跡では、山形県埋蔵文化財センターおよび寒河江市教育委員会・高瀬山遺跡発掘調査団による調査が行われ、杉久保型ナイフ形石器と神山型彫刻刀形石器を指標とする石刃石器群が出土した。石器は長軸9m、短軸5mの範囲で出土し、その中に6～7か所の密集部がある。18,250±70yBP（非校正）の年代が出されている。

宮城県加美町葉菜原No.15遺跡は、加美町教育委員会によって2011年に調査が行われ、4か所の集中地点からナイフ形石器や石刃などの遺物が出土した。

福島県会津若松市笹山原遺跡No.16の調査は、2002年から郡山女子大学によって行われている。2011年の調査では、1,500点の石器が出土した。凝灰質頁岩と呼ばれる地元の石材を使用し、石刃や小型剥片を含めた石器製作が行われている。これまでのものと同様、28,000～30,000yBPの頃と推測されている。また、同県新地町の赤柴遺跡では、石器集中が1か所出土しており、これに礫群が伴う。有樋尖頭器が出土している。ここでは少数ながら北方系細石刃石器群も出土している。

関東

千葉県ではつくばエクスプレス建設に伴う大規模な発掘調査が継続して行われており、柏市大割遺跡・原畑遺跡、流山市市野谷芋久保遺跡などで、大規模な石器群が検出されている。印西市荒野前遺跡・泉北側第3遺跡、流山市大久保遺跡・市野谷向山遺跡、四街道市清水遺跡・新久遺跡、柏市農協前遺跡の報告書が刊行された。

荒野前遺跡は6文化層から26ブロック、2,777点の石器群が検出されている。新田浩三氏により第3文化層（武蔵野台地Ⅶ層上部～Ⅵ層下部段階）と第5文化層（武蔵野台地Ⅳ層中部～Ⅳ層上部段階）の石器群の槌状剥離の検討が行われている。

大久保遺跡第2a文化層は18ブロック、8,468点の石器群が検出されている。ナイフ形石器76点、角錐状石器37点は武蔵野台地Ⅳ層下部～中部の石器群と類似している。

市野谷向山遺跡第2文化層は鎌ヶ谷市東林跡遺跡と類似する武蔵野台地Ⅶ層段階の石器群である。

泉北側第3遺跡と農協前遺跡では環状ブロック群が検出され、山岡磨由子氏、島立桂氏により構造分析が行われている。

東京都では、Ⅲ～Ⅳ層上部の東北系と推測される珪質頁岩製の槍先形尖頭器石器群を検出した瑞穂町松原遺跡と堅果類、鱗莖・根莖類の可能性ある残留デンプンが石皿様の石器から検出された調布市飛田給北遺跡第9地点の報告書が刊行された。

群馬県では武井遺跡が明治大学により発掘調査されている。発掘調査報告書では環状ブロック群が検出された前橋市上泉唐ノ堀遺跡を含む『上武道路 旧石器時代遺跡群（3）』、藤岡市の白石北原遺跡の報告書が刊行されている。

中部

長野県では中横断自動車道建設に伴う佐久市高尾A遺跡の発掘調査が実施され、丘陵斜面の沢跡際から台形石器を含む361点の石器群が検出された。長和町では明治大学黒曜石センターにより黒曜石原産地周辺の古環境・古気候と人類活動の復元を目的として、広原湿原の調査が行われた。阿智村では愛知学院大学により、治部坂遺跡の分布調査が行われている。

黒曜石製の横長剥片素材のナイフ形石器を特徴

とする長野市南曾峯遺跡の発掘調査報告書が刊行された。

岐阜県では下呂石の産地、下呂市湯ヶ峰中腹に位置する大林遺跡の発掘調査が行われ、大型の台形石器やナイフ形石器が検出されている。

近畿・中国・四国

広島県では、中国横断自動車道尾道松江線建設事業などに関連する発掘調査や報告書刊行が続いている。発掘調査事例として只野原3号・4号遺跡（庄原市）、報告書刊行事例として上深石山動植物遺存体包含地（同）、和知白鳥遺跡（三次市）をあげることができる。

只野原3号遺跡では、ATの上下（上位は較正後¹⁴C年代で約2.0～2.1万年前降下とされる三瓶浮布テフラとATの間、下位はATと、火山灰層序により約5万年前降下とされる三瓶池田テフラの間）で石器群が確認された。上位石器群には礫群、下位石器群には配石や土坑が伴う。

只野原3号遺跡に隣接する只野原4号遺跡では、AT下層から炭化物などが出土した。只野原3号・4号遺跡の5kmあまり北で確認された上深石山動植物遺存体包含地では考古遺物は発見されなかったが、最終氷期最寒冷期のものと推測される昆虫遺体や、SⅠ降下期から現代に至る堆積層のテフラの同定、堆積層や木材の年代測定、植物珪酸体分析など多様な自然科学分析が行われた。石器群の変遷のみならず、堆積層序や古環境を知る基礎資料の整備が進んでいる。和知白鳥遺跡では、ATガラスピーク層準の下位から、小型のナイフ形石器や台形様石器などを指標とする石器群が報告された。石器群の形態的特徴は、概ね武蔵野編年Ⅶ層下部からⅨ層上部段階に属すると推定されるが、その細部は広島県内（西中国山地）の石器群と微妙に異なる部分があり、中国山地東部の影響が一部及んでいる可能性が示唆されている。また、打製石器は石材と器種の関係から、いわゆる「管理的」石器 *curated tool* と「便宜的」石器 *expedient tool* として解釈が可能であるうえ、大型の敲石類については、打製石器の製作用具とは異なる機能、例えば植物質食糧の加工用具としての機能を想定するなど、石器群の地域性や石器の用途、生業等に関する多くの問題を提起している。

今後、尾道松江線計画地内ではほかに発掘調査

が実施された3遺跡の報告書刊行が控えており、一括資料に恵まれなかった当該地域の様相解明が一気に進むと期待される。

大山北麓に位置する豊成叶林遺跡（とよしげかのうばやし、鳥取県大山町）でも、2011年、A T直下の層準で遺物集中部2か所が確認された。玉髓製のナイフ形石器や石刃など70点を超える石器が出土したほか、ブロック外から黒曜石製ナイフ形石器1点が単独で出土した。またブロックの1基に重複して、炭化物が密に分布し土が変色している部分が確認され、焚火跡と推定されている。この地域も大山系テフラなどによる良好な堆積環境下にあるうえ、旧石器時代資料の確認事例が増加しつつある。今後も良好な新資料が期待できる。

九州

高速道路建設等に伴って多数の発掘調査が行われている宮崎県を中心に、良好な堆積環境に裏打ちされた重層遺跡や一括資料の発掘調査や報告書作成が活発である。

宮崎県では向原中尾第1・2遺跡、向原中尾第4遺跡（以上、日向市）、俵石第1遺跡、俵石第2遺跡（以上、都農町）、王子山遺跡（都城市）などで発掘調査が行われ、森ノ上遺跡（延岡市）、前ノ田村遺跡、前ノ田村上第2遺跡（以上、川南町）、俵石第1遺跡（都農町）、野首第2遺跡、猪ノ原遺跡、五反畑遺跡B地区（以上、宮崎市）などの報告書が刊行された。局部磨製石斧ほか宮崎編年第1段階の石器群（俵石第2遺跡）、剥片尖頭器の製作関連資料（前ノ田村遺跡、前ノ田村上第2遺跡）、角錐状石器や瀬戸内技法関連資料（猪ノ原遺跡）、A T下位での複数文化層（俵石第1遺跡）など、その成果も多様である。

このほか、天神段遺跡（鹿児島県曾於郡大崎町、2009年度から発掘、細石刃文化期石器群・小型台形石器を伴う石器群・小型ナイフ形石器を伴う石器群が層位的に出土）、宮ノ上遺跡（鹿児島県南九州市、2010年報告書刊行、頁岩の原産地遺跡、ナイフ形石器文化期の3文化層確認、石器製作技術の復元に有効な多数の接合資料が確認）、地蔵平遺跡（佐賀県佐賀市、2007～2010年度発掘、2011年度報告書刊行、4文化層）、瀬田池ノ原遺跡（熊本県菊池郡大津町、2003～2007年度発掘、

2009年度報告書刊行、7文化層を確認）などをあげることができる。

重要遺跡の調査としては、2008年度から鹿児島中種子町の大津保畑遺跡及び隣接する今平・清水遺跡で行われている発掘調査をあげることができる。これらの遺跡では、種IV火山灰（約30,000年前降下）直下で12基の土坑が確認され、日本最古の落とし穴と注目されているが、範囲確認を目的とした発掘調査により、新たに複数の落とし穴が確認されたほか、敲石や磨石を主体とする石器群が検出された。また、長崎県では佐世保市教育委員会が『佐世保の洞窟遺跡II』を刊行した（2010年）。2006年から行われてきた福井洞穴の範囲確認調査結果が総括されている。

2010年2月に更新世人骨が確認された白保竿根田原洞穴遺跡では、2010年度に発掘調査が実施され、さらに追加の更新世人骨が得られている。

謝辞

本稿執筆にあたり、麻生敏隆、鹿又喜隆、直江康雄、長屋幸二、新田浩三、野口淳氏に御教示・御協力いただきました。ありがとうございました。

2012年度総会・記念講演・一般研究 発表・シンポジウム開催要項・ プログラムの御案内

先にお知らせいたしました2012年度日本旧石器学会大会について、下記の通り詳細をご案内いたします。一般研究発表（口頭・ポスター発表）の詳細については、後日、学会ホームページ上でお知らせいたします。

日本旧石器学会第10回大会

会場：独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所

平城宮跡資料館講堂他（奈良市二条町二丁目9-1）

主催：日本旧石器学会

共催：国立文化財機構 奈良文化財研究所

日程：2012年6月23日（土）～24日（日）

・6月23日（土）

総会 (13:00～14:00)

記念講演 (14:15～15:15)

中央アジアの旧石器時代

Z. タイマガンベトフ氏（カザフ国立大学）

一般研究発表（15:30～16:30）宮崎県都城市王子山遺跡から出土した縄文時代草創期の炭化植物遺体 工藤雄一郎ほか

（ほか1本：予定）

シンポジウム（16:35～17:30）

趣旨説明

基調講演

旧石器データベース Hacks!

近藤康久

懇親会

・6月24日(日)

シンポジウム (9:00 ~ 15:30)

- 1 「日本の旧石器時代遺跡」データベースの成果と応用
 - 1-1. 「日本の旧石器時代遺跡」データベースが明らかにしたものと明らかにすべき課題
光石鳴巳・小菅将夫
 - 1-2. 地形・地質・考古遺跡情報の連係と旧石器時代遺跡の立地・構成
野口 淳
 - 1-3. 北海道における旧石器遺跡の分布と立地
高倉 純・小杉 康
 - 1-4. 相模野台地における黒曜石利用の時空間的変遷
諏訪 順
 - 1-5. 九州、後期旧石器時代～縄文時代初頭の遺跡立地・分布
芝 康次郎
- 2 遺跡データベース、GIS 考古学の展開
 - 2-1. ヨーロッパにおける中期 - 後期旧石器時代遺跡の時空間分布
佐野勝宏
 - 2-2. 縄文時代の葬制・祭祀研究におけるデータベース構築と分析手法の開発
中村 大
 - 2-3. DEMによる地形解析と遺跡分布の検討
千葉 史

ポスター発表

会場：平城宮跡資料館 企画展示室

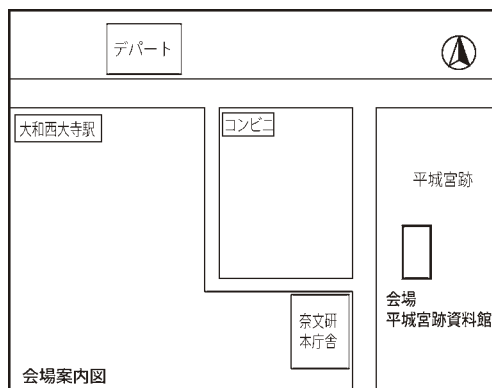
日程：6月23日(土)～24日(日)

*コアタイムは24日12:00～13:00

会場への交通案内：近鉄大和西大寺駅下車、徒歩5分。奈良文化財研究所本庁舎の東側です。<http://www.nabunken.go.jp/heiho/museum/page/information.html> ※駐車場はありませんので、お車でのご来場はご遠慮ください。

宿泊：各自でご手配下さい。会場周辺には、多数のホテル・旅館があります。JR・近鉄奈良駅、近鉄新大宮駅周辺の宿泊施設が便利かと思われます。

参加申し込み：ニュースレター20号の送付時にハガキを同封します。必要事項を記入の上、6月15日までに、事務局までお申込み下さい。また、やむを得ず欠席する場合は、会則第5条により、欠席の委任状を含め全会員の5分の1以上の出席をもって総会が成立しますので、同ハガキ下段に記載された委任状に記入、捺印のうえ投函願います。



日本旧石器学会研究グループ
2011年度活動報告

沖縄更新世人類研究グループ

①台湾先土器時代遺跡の現地調査および資料調査
(2011年12月)

台湾における先土器時代の洞穴遺跡として知られる台東県長濱郡の八仙洞遺跡、同成功鎮小馬海蝕洞遺跡の現地踏査および、台湾大学に収蔵されている石器群、人骨、動物遺体の資料調査を実施した。八仙洞では、近年の調査によって更新世末の人類活動を物語る多くの証拠が得られており、今後の研究の進展が期待される。

②宮古島における先土器遺跡関係現地踏査 (2012年2月)

宮古島ツツピスキアブ遺跡では、宮古島市の調査によって8400BPの年代値が得られたイノシシ遺体とともに、非在地系のチャート円礫、石片が出土しており、人為的搬入の可能性が考えられている(宮古島市教育委員会2011:48頁)。このチャート石片の産地解明を目指した踏査を実施し、宮古島北方の池間島カギンミヒダにおいて、ツツピスキアブ産石材に比較可能なチャート円礫1点を採集することができた。

③石垣島における先土器遺跡関係現地踏査 (2012年2月)

石垣島白保竿根田原洞穴遺跡III層(完新世初頭)で確認された、人為的搬入が推定される火成岩やチャート等の非在地系石材の比較資料として、石垣島観音崎において富崎層チャートの露頭調査を実施し、原石およびGeofactを回収した。

④南城市サキタリ洞遺跡出土の更新世化石群の調査研究
(2011年10月～2012年3月)

2011年7～8月の調査において、沖縄島南部に位置する南城市サキタリ洞の後期更新世の堆積層中より回収された動物遺体(カニ爪、陸産貝、イノシシ等)、植物遺体(炭化材、種子等)に関する整理作業および比較検討を実施した。

⑤ Dual Symposia への参加・発表

(2011年11月26日～12月1日)

Symposium on the Emergence and Diversity of Modern Human Behavior in Palaeolithic Asia.

Session I: Dispersal and migration: skeletal and genetic evidence (2)

- Yousuke Kaifu, Masaki Fujita, Minoru Yoneda — Inferring Population History in the Late Pleistocene of the Ryukyu Islands, Southwestern Japan
The MHB Symposium Poster Session
- Reiko T. Kono, Hajime Sakura, Yousuke Kaifu — Early Modern Human Remains from Pinza-abu, Miyako Island, Southwestern Japan
- Masaki Fujita, Shinji Yamasaki, Itsuro Oshiro — Biostratigraphy in the Late Pleistocene of the Okinawa Island and Its Implication for the Chronology of Early Modern Humans from Minatogawa
- Chiaki Katagiri, Shinji Yamasaki, Masaki Fujita, Rie

Tokumine, Motomasa Namiki, Kohei Ohori, Shinya Akamine, Hiroshi Sugawara, Naomi Doi, Koichi Kobayashi, Minoru Yoneda – Preliminary Excavation of the Late Pleistocene Human Burials at the Shiraho-Saonetabaru Cave Site in Ishigaki-jima Island, Okinawa

- Minoru Yoneda, Yuichi I. Naito, Takashi Gakuhari, Mai Takigami, Yu Itahashi, Naomi Doi, Chiaki Katagiri, Shinji Yamazaki, Masaki Fujita – How Did Pleistocene Humans Adapt to a Remote Island – : Subsistence Reconstruction Based on Isotopic Analyses of Human Remains from the Shiraho-Saonetabaru Cave Site on Ishigaki Island, Okinawa, Japan
- Takashi Gakuhari, Mai Takigami, Masaki Fujita, Shinji Yamasaki, Chiaki Katagiri, Hiroyuki Matsuzaki, Minoru Yoneda – Environmental Reconstruction of Pleistocene East Asia Based on Faunal Remains from Ishigaki Island (山崎真治)

役員選挙結果のお知らせ

先の2012年3月1日～20日に郵送で行われた、次期日本旧石器学会役員選挙の投票に関し、開票作業を3月24日に行いました。集計の結果を下記のとおり報告します。なお、今回の選挙当選者は本年6月に開催予定の次期総会で承認を受けた後、次期役員となる予定です。

1. 場所：明治大学博物館 会議室
2. 日時：2012年3月24日 9時～11時
3. 開票作業：藤波啓容（選挙管理委員長）、及川穰（選挙管理委員）、島田和高（総務委員）
4. 投票数

1) 郵送投票数 86票

氏名	投票数	地域	順位
阿子島香 <small>あこしまかおる</small>	40	東北	○
伊藤 健 <small>いとうけん</small>	44	関東	2
岩谷 史記 <small>いわたしき</small>	34	九州	○
沖 憲明 <small>おきのりあき</small>	29	中四国	○
小野 昭 <small>おのあきら</small>	65	関東	○
加藤 真二 <small>かとうしんじ</small>	42	近畿	○
門脇 誠二 <small>かどわきせいじ</small>	31	中部	7
鹿又 喜隆 <small>かのまたよしたか</small>	31	東北	7
鎌田 洋昭 <small>かまたひろあき</small>	19	九州	13
軽部 達也 <small>かるべたつや</small>	26	関東	10
絹川 一徳 <small>きぬがわかずのり</small>	41	近畿	3
笹原 芳郎 <small>ささはらよしろう</small>	18	中部	14
芝 康次郎 <small>しばこうじろう</small>	28	近畿	9
諏訪間 順 <small>すわまじゆん</small>	52	関東	1
高倉 純 <small>たかくらじゆん</small>	42	北海道	○
谷 和隆 <small>たにかずたか</small>	37	中部	4
堤 隆 <small>つつみたか</small>	57	中部	○
丹羽野 裕 <small>にわのひろし</small>	14	中四国	15
藤田 尚 <small>ふじたなほ</small>	20	中部	12
麻柄 一志 <small>まがらかずし</small>	26	中部	10
山岡 拓也 <small>やまおかたくや</small>	37	関東	4
吉川 耕太郎 <small>よしかわこうたろう</small>	35	東北	6

- 2) 郵送有効投票数 86票
- 3) 投票数 808票
5. 当選者

7地区の上位得票者1名(○印)と、総得票数上位15名が当選者。

以上の当選者のほか、投票数が1票～4票の方が27名おられました。その合計は40票です。

講演会

ヨーロッパ旧石器時代洞窟壁画

本年2月26日(日)、日本旧石器学会および明治大学黒耀石研究センター共催の講演会「ヨーロッパ旧石器時代洞窟壁画」が明治大学駿河台キャンパスにおいて開催された。考古学講演会では聴講者は通常、石器研究者や考古学ファンなどであるが、会場を埋めた人々には見慣れないアート関係者の姿も目立ち、多方面にわたる関心分野であることが実感させられた。

講師は、東京藝術大学美術研究科リサーチセンターの五十嵐ジャンヌ先生で、フランス国立自然史博物館で先史学博士の学位を取得され、フランスとスペインで50ほどの洞窟を調査された日本では数少ないヨーロッパ旧石器時代洞窟壁画のエキスパートである。現在は、マドレーヌ文化期の自然主義的な動物像と幾何学形記号との多角的研究をテーマとされている。

日本では存在していない洞窟壁画であり、一般の普及講演会も兼ねているため、今回は概説的なお話をいただいた。

まず、壁画が描かれた場所として、洞窟、岩陰、野外があり、技法には、彩画、刻画、浮彫り、彫塑がみられるという。その分布は、フランコ=カンタブリア地方(フランス南西部からスペイン北部)が中心で、東はカボヴァ洞窟、イグナティエフ洞窟(ロシア)、西はコア溪谷(ポルトガル)、北(西)はチャーチ・ホール、ロビン・フット洞窟(イギリス)、南はレヴァンツォ洞窟、アダウラ洞窟(イタリア・シチリア)に及んでいる。

制作年代と時代はおおよそ次のようで、オーリニャック文化からマドレーヌ文化までの時間幅である。

- ・オーリニャック文化、34,000 – 28,000年前
ショーヴェ、ブランシャール洞窟
- ・グラヴェット文化、28,000 – 22,000年前
パール=ノン=パール洞窟
- ・ソリュートレ文化、22,000 – 17,000年前
テット=デュ=リオン洞窟
- ・マドレーヌ文化、17,000 – 1,0000年前
アルタミラ、ラスコー、ニオー洞窟

かつてショーヴェ洞窟の3万年をさかのぼる年代が出された時には、驚きを禁じ得なかったが、その年代決定は、覆われた堆積層、覆われた鍾乳石、文化層との相関関係、様式比較、顔料の放射性炭素年代測定法などによってなされるという。洞窟壁画のテーマは、動物、人間、記号、手形等であり、動物と記号ではおおよそ次のようなものがみ

られる。

動物：ウマ、ウシ科（ビゾン、オーロックス）、シカ、野生ヤギ、トナカイ、マンモス、クマ、ネコ科の動物（ライオン、ヒョウ）、サイ、サカナ、トリなど

記号：テクティフォルム（屋舎形）、クラヴィフォルム（棍棒形）、アヴィフォルム（鳥形）、スキュティフォルム（楕圆形）、四角形、矢印形、V字形・逆V字形、枝分かれ、逆トゲ、グリル状・網状、線状、点状

なぜ洞窟壁画が描かれたのか、その解釈については古典的な「狩猟呪術説」はよく知られるところだが、呪術説（狩猟呪術、増殖呪術）、「芸術のための芸術」説、トーテミズム、シャーマニズムによるものとする解釈があり、構造主義的なアプローチによる象徴構造の解釈も試みられているという。

1980年代以降では、画像配置からみる象徴構造、たと



講演会風景



レ・コンバレル洞窟の入口（五十嵐氏写真提供）



レ・コンバレル洞窟のマンモスの刻画（五十嵐氏写真提供）

えばニオー洞窟の広間（黒い動物像）と通廊空間（赤い記号）をめぐる研究などが紹介され、走査型電子顕微鏡による研究や顔料分析、新しい放射性炭素年代測定結果など理化学的調査と考古学側からの解釈の可能性が示された。

近頃、ロードショーとなったショーヴェ洞窟の3D画像はまるで実際に洞窟内に入ったかのように鑑賞した人びとを圧巻させたが、日本ではまずお目にかかれない旧石器時代のアートが、ホモ・サピエンスの精神文化研究の無限の可能性を秘めていることを思い知らされた講演だった。

（広報委員会）

第28回中・四国旧石器文化談話会 「高知県における旧石器文化の様相」 開催報告

2011年10月8日（土）・9日（日）の両日、高知県立埋蔵文化財センター（高知県南国市）において、同センターと中・四国旧石器文化談話会の主催により、第28回中・四国旧石器文化談話会が開催された。

今回のテーマは、第21回からの統一テーマとしている、開催県の既発見資料の集成・再検討を通して、研究の現状把握と今後の研究の課題を共有しようとするものである。参加者数は中・四国を中心に、東北から九州まであわせて40名を超える盛況ぶりであった。

両日のプログラムは、次のとおりである。（以下、発表者は敬称略。）

会場：高知県立埋蔵文化財センター研修室（高知県南国市）

第1日目 10月8日（土）13:30～17:00

- 1 開会行事
- 2 調査事例報告「広島県内における近年の発掘調査事例」沖憲明（広島県教育委員会）
- 3 報告「高知県の旧石器文化研究と木村剛朗氏」森田尚宏（（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター）
- 4 遺物見学（奥谷南遺跡、新改西谷遺跡、ナシケ森遺跡、木村剛朗寄贈資料）
- 5 基調報告1「南四国における後期旧石器群の様相」松村信博（香南市文化財センター）
- 6 基調報告2「高知県のナイフ形石器文化」氏家敏之（（公財）徳島県埋蔵文化財調査センター）
- 7 各県近況報告（閉会后、高知市内で懇親会）

第2日目 10月9日（日）9:30～11:50

- 8 基調報告3「南四国の細石刃文化」多田仁（（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター）
- 9 基調報告4「九州と南四国の細石刃文化」松本茂（宮崎県埋蔵文化財センター）
- 10 遺物見学
- 11 質疑・討論（司会：北浩明（鳥取県埋蔵文化財センター）・沖憲明（広島県教育委員会））
- 12 開会行事

調査事例報告では沖憲明が、近年広島県北東部で相次いだ発掘調査事例を紹介した。庄原市の只野原3号遺跡では、

2009年度及び2010年度の2回に分けて行われた発掘調査において、三瓶山起源の火山灰や始良丹沢火山灰（AT）に挟まれた2枚の文化層が確認されており、良好な層位的出土例として今後の整理作業に期待が持てる。2010年度末に報告書が刊行された、三次市の和知白鳥遺跡については、AT下位の良好な一括資料として編年及び集落構造解明に資する重要な資料である。同じく2010年度末に報告書が刊行された、庄原市の上深石山動植物遺存体包含地については、人工遺物（考古資料）は出土しなかったものの、堆積層のテフラ同定や年代測定ほか各種自然科学的分析が行われ、中国山地中央部における堆積層序と自然環境の変遷の解明に資する基礎資料が得られている。

森田尚宏による報告は、高知県の旧石器時代研究史の概観と、高知県在住で、四国西南部において多数の旧石器時代遺物を発見し、その資料の公表を続けてきた考古学研究者である、故・木村剛朗氏の業績をまとめた。

基調報告1では、松村信博が、奥谷南遺跡を中心に、高知県内のナイフ形石器文化後半期及び細石刃文化期の主要な遺跡と資料について報告し、研究の現状と課題が述べられた。

基調報告2では、氏家敏之が、奥谷南遺跡と新改西谷遺跡のナイフ形石器の形態組成とその編年上の位置付けについて考察し、奥谷南遺跡出土資料については角錐状石器が伴う段階、新改西谷遺跡出土資料についてはAT下位に遡る可能性を示唆した。

基調報告3では、多田仁が、四国地方南部の細石刃文化期資料を概観し、九州や紀伊半島、東海地方出土資料との

比較検討を経て3段階に区分する編年案を示すとともに、各地域間の関連性について述べた。

基調報告4では、松本茂が、四国南部に隣接する地域といえる九州南部の細石刃石器群の分析を元に、「相互貫入現象」と「異型式の共存現象」の2つの視点から、奥谷南遺跡の細石刃核の検討を行い、船野型と野岳・休場型細石刃核の共存と在地化の問題が提起された。

質疑・討論では、氏家・松本両名の発表内容を軸に、活発な議論が繰り広げられた。氏家の示唆した、新改西谷遺跡出土ナイフ形石器がAT下位に遡る可能性については、周辺地域に論を補強する資料が少なく、更なる検討が必要とされた。

細石核については、松本の報告・追加説明を基点に、船野型及び野岳・休場型等の細石核の型式認識について議論が盛り上がった。奥谷南遺跡の多様な形態を示す細石核を理解するには型式学的研究のみでは困難で、石器製作技術を明らかにし、遺跡ごとにその運用のされ方と「型式」の現れ方を関連付けて理解する必要性が指摘された。このことは細石核にとどまらず石器研究全般に対する新たな視点となるべきことが議論された。1日目と2日目にまたがって設定された資料見学の間でも、奥谷南遺跡等の発掘調査資料や、故木村剛朗氏が採集された西南四国を中心とする展示資料をつぶさに観察しながら、活発な議論が繰り広げられた。既発見資料の再検討が新たな研究の展望をもたらした、非常に刺激的かつ濃密な会であった。

(沖 憲明・北 浩明)



第28回中・四国旧石器文化談話会 会場風景



第28回中・四国旧石器文化談話会 遺物見学会風景

岩宿フォーラム2011「上白井西伊熊遺跡と東日本の瀬戸内技法」開催報告

平成23年11月5・6日の2日間、みどり市ふれあい学習において、岩宿フォーラム2011が開催された。平成15～16年に渋川市国道17号線鯉沢バイパス工事において発掘調査された「上白井西伊熊遺跡」の瀬戸内技法による石器群を中心に東日本における瀬戸内技法技術集団の様相と西日本の瀬戸内技法中心地とを比較検討し、その拡散について見直す機会として開催されたものである。

今回のフォーラムでは、基調講演として、麻柄一志氏が瀬戸内技法研究の経過と瀬戸内技法の技術的な変遷、瀬戸内系集団の拡散について講演され、上白井西伊熊遺跡の位置づけに関する問題提起を行った。続いて、第2部報告では大西雅広氏が発掘調査における石器群様相について、早田勉氏が上白井西伊熊遺跡の立地とテフラ、遺跡の年代について、軽部達也氏が石器群の技術的な内容について基調報告した。この基調報告により、上白井西伊熊遺跡が東日本では数少ない西日本系瀬戸内技法で製作されたもので、国府型ナイフ形石器だけでなく、その製作工程において、瀬戸内技法の第1から第3工程までのすべてが残されたものであることが明らかになった。また、遺跡の立地と成因については早田氏の分析により、石器群の年代や層序についてはAs-Sr下位、As-BPG降灰中との見解を示した。阿久澤

智和・角田真也氏は、上白井西伊熊遺跡の石器石材入手が隣接利根川河川礫である可能性を、河川礫調査の結果を交えて模索した。第Ⅲ部は東日本の石核底面を持つ国府系ナイフ形石器の様相と年代についての報告で、遺跡の分布、様相、当該期石器群の様相と国府系ナイフ形石器の位置づけについて西井幸雄氏、北関東について亀井健太郎氏、南関東は藤田健一氏、新潟県域は吉井雅勇、東北地域では会田容弘氏は越中山K遺跡を中心にそれぞれ発表をおこない、瀬戸内技法の日本海側拡散の様相を報告した。続いて瀬戸内技法の中心地域の様相として、大阪の絹川一徳氏、奈良の森先一貴氏が瀬戸内技法の変遷と年代観、石器群について報告した。次いで長野の須藤氏が、ナウマンゾウが移動する際にできる象道を紹介、動物群の移動領域と瀬戸内技法集団の拡散について問題提起を行った。

パネルディスカッションでは、はじめに上白井西伊熊遺跡の層序と年代についての再確認を早田氏が行い、次いで西日本の瀬戸内技法の変遷がディスカッションの中心となった。会場からは伊藤栄二氏が瀬戸内技法の研究の経過について触れ、瀬戸内技法の須藤氏の報告に触れ自然史博物館の長谷川善和氏が動物群の様相についてコメント、最後に明治大学の安藤政雄氏が今回のフォーラムについて、東日本の瀬戸内技法や上白井西伊熊遺跡についてあまり議論されなかった点について指摘し、瀬戸内技法を巡る課題や問題点についてももう少し整理して議論すべきと総括した。

19年目を迎えた岩宿フォーラムであるが、岩宿フォーラム実行委員会はその地域研究が評価され、平成23年12月1日「石川薫記念地域文化奨励賞」を受賞した。今後も岩宿時代研究における群馬からの情報発信の基軸となる活動が期待される。(軽部達也)



岩宿フォーラム2011 討論風景



岩宿フォーラム2011 資料展示会場風景

おしらせ

学会ホームページアドレス変更

2012年3月末で情報学研究所のサービスが終了したことに伴い、日本旧石器学会のサイトは下記に移転しました。リンクの再登録をお願いします。なお、RSSご利用の場合も再登録が必要となります。

新アドレス <http://palaeolithic.jp>

会費納入のお願い

日本旧石器学会は、皆様の会費によって運営されているため、会費は原則前納とさせていただいております。会費未納の方々につきましては、速やかに所定の会費の支払い手続きをなされますようお願い申し上げます。年会費は5,000円で、振込先は、日本旧石器学会 郵便振替番号00180-8-408055です。

転居をされた方は必ず住所変更の手続きをお願いいたします。事務局までメール等でご連絡ください。

編集後記

今号では、震災の影響等でお休みとした2010年の分も含めて国内の調査動向を特集しました。全国的に発掘調査件数の減少や行財政の緊縮化がいわれるなかでも、調査・研究の積み重ねが着々と進んでいることがわかります。各地の関係者の方々の奮闘に敬意を表します。

さて、紙面中でも紹介のとおり、6月23・24日には、奈良で今年度の総会及び記念講演・研究発表・シンポジウムが開催されます。当日は多彩な研究発表が予定されているほか、総会では役員の交代も予定されています。皆様奮って御参集ください。(沖)

日本旧石器学会ニュースレター

第20号

2012年4月27日発行

編集：日本旧石器学会ニュースレター委員会

谷和隆・山原敏朗・沖憲明

発行：日本旧石器学会

事務局：明治大学博物館 島田和高

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1

アカデミーコモン地階 電話：03-3296-4431

E-mail ma96018@mics.meiji.ac.jp

HP <http://palaeolithic.jp>